

# 「日経2月の『私の履歴書』で作曲家の村井邦彦が、一緒に仕事をしたハーブ・アルパートをプロデューサーとかレコード会社創始者と書いていた。トランペット奏者としてしか知らなかったよ。」

↳ 「ハーブ・アルパートとティファナ・ブラス、という名が僕らの世代の記憶にはあるね。彼らの最初のヒットが、バート・バカラックと作詞家ハル・デイヴィッドの”This Guy’s in Loving with You”。今日は今年2月8日に94歳で亡くなったバカラックを話題にしたいな。ところで、アルパートが最初にこの曲をもらったときは、This girlだった。これを This guy に変えたという。」

# 「その後にディオヌス・ワーウィックのような女性歌手が歌うときは、また This girl にしたわけだ。」

↳ 「そうだね、瑣末なことだけど。ところでワーウィックというのは間違い。正しくはウォリックだよ。イギリスに同じ Warwick という綴りのお城があって、ウォリックと発音する。で、バカラックが彼女を紹介している映像で確かめたら『ウォリック』と発音していた。ついでに、ホイットニー・ヒューストンが、ディオヌスの姪といわれていたけど、正しくは従姉妹同士というのが最新情報だ。」

# 「バカラックの全盛期は60年代後半から、70年代前半だね。僕らの年代は、このころが20代だったから、そう感じるのか、ポピュラー・ソングでよい曲が沢山あった。バカラックの曲は調子が良くて明るいけど、時代背景との関係は？」

↳ 「60年代後半はベトナム戦争、公民権運動、暗殺など暗いニュースがアメリカには多かったが、バカラックの曲が人々を癒やしていたともいえる。“What the World Needs is Love”は、作詞はハル・デイヴィッドだけど、時代背景と関係あるかも。」

# 「ビートルズ活躍の時代でもあったけど、バカラックとの関係は？」

↳ 「ビートルズの無名時代にイギリスの同じホールで別々に演奏したことはあるが、コラボをしたことはない。それをバカラックは残念がっていた。バカラックの曲 “Baby, It’s You” をビートルズが録音したことを光栄に思うとも言っている。僕が多分1971年に買ったと思われる、『バート・バカラックの魅力(作品集)』という楽譜が今、手元にある。そこに渡辺貞夫が『ビートルズの曲なんかだと、こうなるだろうと思う方向に進むが、バカラックの曲には意表をつくメロディー・ラインがある』と書いている。」

# 「バカラックは日本に何度か来ているらしいね。」

↳ 「初来日は71年。今調べてみると武道館での公演もあったらしいが、僕が聴きに行ったのは新宿の厚生年金会館。当時彼女もいなくて一人で行った。バカラック・サウンドはオーケストラル・ポップとも言われ、弦楽器に加え派手な金管が歌と共演するスタイルなので、歌手はいなくても楽しめると思って聴きに行ったのだが、やっぱり物足りなくて感激が少なかった。バカラック自身は歌ったけどね、“This guy” と “What the World Needs is Love” だったかな？ 歌は上手と感じなかった。」

# 「バカラックの曲は親しみやすい (accessible)、といえるね。」

↳ 「若いときに師事したフランス人のクラシック作曲家、ダリウス・ミヨーから、『誰でも口笛で口遊みたくなるようなメロディックなものを恥じることはない』といわれたたそうだ。1957年に初ヒットになり、特にイギリスではヒット・チャートの1位になった、『マジック・モーメント』は温かみのある歌手ペリー・コモが歌ったけれど、出だしのところなど口笛向きだね。」

# 「バカラックの曲は親しみやすいということは、シンプルということかな？」

↳ 「先に引用した渡辺貞夫の文章にはバカラック・サウンドの特徴が述べられている。『単純だが、単純な単純さでなく、コードや、コードの上に乗ったメロディー・ラインがユニーク』『フレーズのリズムが独特で、シンコペーションも多様で自然』『変拍子も…気がつかないような使い方をしている』等等。ディオヌ・ウォリックは、“Anyone Who Had A Heart“では拍子記号がひっきりなしに変化しているとバカラックに指摘している。“What the World Needs Now Is Love”を最初に録音した歌手ジャッキー・デシャノン『(バカラックは、メロディーを歌い手が勝手に変えてもいい場合もある、と言ったが) 私にはそれはとてもできなかつた』と言っている。」

# 「ニューヨークの音楽家には、ユダヤ人が多いが、ニューヨーク育ちのバカラックもドイツ系ユダヤ人だね。」

↳ 「ユダヤ人音楽家の話をしだしたら、長くなるので、ドイツ系という点で話してみたい。バカラックが流行った時期に、Bach, Beethoven, Brahms に Bachrach を加えて偉大な4Bなどと言われたことがある。みんなドイツ系だ。Bachrach でなく Beatles を加えて4Bと呼ぶ人もいたけれどね。」

# 「ドイツ人といえば、バカラックは若い頃、マレーネ・ディートリヒのための指揮、伴奏、編曲をしていたそうだね。1901年生まれのディートリヒは、1928年生まれのバカラックを寵愛したそうだな。」

↳ 「ディートリヒがバカラックを聴衆に紹介する映像をYouTubeで見たらね、彼女はこう言っていたよ。“I wish I could say, ‘He is my composer.’ But that isn’t true. He is everybody’s composer.” ディートリヒは、まだ無名のバカラックをシナトラに推薦したが無視されたため、たいそう腹を立てたそうだ。バカラックが編曲した『花はどこへ行った』をディートリヒが歌っている珍しい映像も残っているよ。シナトラといえば、後年バカラックを『帽子のサイズ7-3/4で作曲している』と評したそうだが、細かいキイ・チェンジを皮肉ってるのかな？」

# 「日本人作曲家への影響は？」

↳ 「バカラック風の曲では、浜口庫之助作曲、島倉千代子歌『愛のさざなみ』が典型的。バカラックの自己への影響を公言しているのは筒美京平。YouTubeで筒美京平によるバカラック風として挙げられた数曲の中には僕になじみのあるものはない。その中にもないものだけど、いしだあゆみの『ブルーライト・ヨコハマ』、尾崎紀世彦の『また逢う日まで』もそうかもしれない。筒美京平がビートルズの曲をバカラック風に編曲したものを集めたレコードもYouTubeにあるよ。」



Malene Dietrich & Burt Bachrach



Hal David



Burt Bachrach



Dionne Warwick

# 「バカラックは、ディオンスのアルバム制作時に彼女と揉めたとか、ハル・デイヴィッドとミュージカルの儲けの分配で争ったとか、言われているけど。」

♪ 「プレイボーイで4回も結婚したとかね。僕は作品に直接関係ない伝記には興味がない。作家の伝記を読んで、その作家が嫌いになり、昔感激した小説まで嫌いになることがあるらしいから。」

# 「君が好きな曲を挙げてくれないか？」

♪ 「1980~90年代の曲は知らない。先に述べた曲は除いて列挙してみよう。ディオンス・ウォリック『サン・ホセ（米語の発音はサンノゼイ）への道 Do You Know the Way to San Jose?』、『恋よ、さようなら I'll Never Fall in Love Again（もとはミュージカルのプロミセス・プロミセスの一曲）』、『小さな願い I Say A Little Prayer』、『アルフィーAlfie(映画主題歌)』、『幸せはパリで The April Fools(映画主題歌)』、『ダスティ・スプリングフィールド『恋の面影 The Look of Love』。他に有名なモノは、僕が特に大好きというわけではないけど、B.J.トーマス『雨に濡れても Raindrops Keep Fallin' on My Head』、トム・ジョーンズ『何かいいことないか子猫ちゃん What's New Pussycats?』、カーペンターズ『遙かなる影 Close to You(先に何人も歌っているカーペンターズのものが最もヒットした)』。

最後に、さっき話題になった【曲の親しみやすさ】について触れておきたい。親しみやすさは『凝り(sophisticated)すぎてないからかもしれない。』とバカラック自身は言っている。『でも、持ちこたえるために工夫を凝らすことは必要。』『凝りすぎて、バーでピアノ奏者が弾かないようではいけない。』とも。」

以上